

頑迷な心の悲劇

[聖書] 出エジプト記 6章 26節～7章 7節

主がエジプトの国でモーセに語られたとき、主はモーセに仰せになった。「わたしは主である。わたしがあなたに語ることをすべて、エジプトの王ファラオに語りなさい。」しかし、モーセは主に言った。「御覧のとおり、わたしは唇に割礼のない者です。どうしてファラオがわたしの言うことを聞き入れましょうか。」

主はモーセに言われた。「見よ、わたしは、あなたをファラオに対しては神の代わりとし、あなたの兄アロンはあなたの預言者となる。わたしが命じるすべてのことをあなたが語れば、あなたの兄アロンが、イスラエルの人々を国から去らせるよう、ファラオに語るであろう。しかし、わたしはファラオの心をかたくなにするので、わたしがエジプトの国でしるしや奇跡を繰り返したとしても、ファラオはあなたたちの言うことを聞かない。わたしはエジプトに手を下し、大いなる審判によって、わたしの部隊、わたしの民イスラエルの人々をエジプトの国から導き出す。わたしがエジプトに対して手を伸ばし、イスラエルの人々をその中から導き出すとき、エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる。」モーセとアロンは、主が命じられたとおりに行った。ファラオに語ったとき、モーセは八十歳、アロンは八十三歳であった。

[序] 先週の礼拝の恵み

先週の日曜日は、北関東連合の教会交流プログラムで8人が上尾教会を訪問し、教会学校の分級と礼拝、午後の懇親会に参加して、良い交わりと学びをして、帰って参りました。礼拝では、A兄に川越教会で子供の時から育って今日に至った証をしていただきました。上尾教会の教会学校分級は子供から青年までは聖書教育のカリキュラムで出エジプト記でしたが、成人科分級3クラスは独自に創世記を学んでいたもので、用意していた説教原稿を離れて、両方を関連させながらのメッセージに変更して、お取次ぎしました。受付に書き直したコピーを置いてあります。また今日の週報のコラム欄に、B姉の感想がのっています。私も同じ感想をもちました。ご参考にしてください。

川越の礼拝は、C兄とD兄が二人でも守ると言ってくださったので、奏楽のE姉と受付F姉の4人で留守番するということになりましたら、何と13人の礼拝になった由、嬉しかったですね。感謝します。上尾との教会交流の第二回は来月の第二日曜2月8日で、秋山牧師と教会の皆さんが川越に来てくださいます。楽しみにしてお待ちしましょう。

[1] イスラエルを救い出す神の計画

さて今日は出エジプト記からの第三回目のメッセージです。多くの国民の父と呼ばれるようになったアブラハムは、75歳の時に神さまから呼び出されて親族と別れ、ユウフラテス川の上流ハランを出発、カナン地方に移住しました。紀元前2000年から1800年頃のことです。三代目のヤコブはイスラエルという名を与えられましたが、晩年に世界的な大飢饉に見舞われた際、ヨセフの招きで一族70人とエジプトのナイル川の東、ゴシェン地方に避難して、そのまま定住しました。紀元前1700年頃のことでしょう。

それから約350年経ち、イスラエルの民の人口が150万人を超えるまでに増加しました。エジプト王はその勢いに脅威を感じ、厳しい重労働を課して、この異国の民を抑圧し始めました。人々の呻きと助けを求める叫びが天に届き、神さまはモーセを指導者に立てて、イスラエルの民をエジプトから脱出させ、アブラハムに約束されていたカナンの地に戻す計画をお立てになりました。

モーセは「生まれた男の子を皆ナイル川に放り込め」という国王の命令により、生後3ヶ月で川に流されたところを王女に拾われ、その子供としてエジプトの王宮で育ちました。しかし40歳の時、血気にはやってユダヤ人を虐待するエジプト人を殺したことで、国王の怒りにふれ、シナイ半島のミディアンに逃れ、荒野で羊を飼う生活を40年送ります。彼を殺そうとした王が死に、代がかわりました。いよいよイスラエルがエジプトを脱出する時節が到来したのです。

神さまは荒野からモーセを呼び出して、救いの計画とモーセの任務を語り聞かせました。「見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ」。しかしモーセは断りました。

モーセの人生は40歳を境に、世界最大の国エジプトの王宮での華やかな生活から、荒野の果てででのしがない羊飼い暮らしへと激変していました。若い日に手にしていた何もかもを、一切失ってしまったのです。深い挫折感に打ちのめされて、このまま世の片隅で一生を閉じるのだと、志を失い、諦め切っていたのではないのでしょうか。羊飼い暮らし40年、万事に否定的で無気力になっていたとしても、不思議ではありません。

その上、国王と交渉して、150万を超える民をカナンに連れ戻すなど、とんでもない大事業です。第一このように多数の奴隷を失えば、国家的大損失ですから、国王が許すわけがありません。神さまの呼びかけに、モーセは繰り返し尻ごみしました。当然でしょう。ところが神さまは、モーセを立ち上がらせてしまわれたのでした。どうやってでしょうか。

[2] 神の新しい呼び名

神さまは、ご自分の新しい呼び名をモーセにお示しになったのです。6章2～3節をご覧ください。「神はモーセに仰せになった。『わたしは主である。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった』。『わたしは主である』と名乗って語るのは、モーセよ、お前が初めてなのだよとおっしゃったのでした。

主——これは主権と支配と権威をあらわす言葉です。すると、この主の前に立つモーセは僕です。へりくだって絶対的に服従する僕なのです。ヘンデルのメサイアが初めてロンドンで公演された時、ハレルヤコーラスのところで、諸王の王、主の主 (King of Kings and Lord of Lords)と歌われるや、イギリス国王ジョージII世が思わず起立したと言われていますね。

「神さまは主」「主なる神」という呼び名には、大英帝国の王を起立させてしまうほどの権威と威厳が備わっているのです。私たちはどうでしょうか。主という言葉、余りに軽く使っていませんか。神さまに対して、身を低くしてへりくだり、絶対的に服従する僕なのだという恐れを私たちは抱いているのでしょうか。全幅の信頼をよせて、我が身の一切を委ね、ひたすら御心を実行する僕だという自覚があるのでしょうか。

神さまは絶望的な状況にあるイスラエルの民を、エジプトから解放する大きな計画をお立てになりました。「モーセよ、私の僕として立ち上がり、私の命じることを行なう者になりなさい。民よ、私の命令に服従しなさい。私は主である」とおっしゃったのでした。

主さえ強ければ、僕は強くなくてよいのです。僕に求められていることは、服従です。忠実さです。主の命令をそのまま実行すれば、主が僕を使って、大いなる業をなさるのです。神さまはモーセの前に、主という新しい呼び名でご自分をお示しになりました。新しい名で神さまに呼びかける——これは神さまに対するモーセの信仰が新しくされたことを意味します。モーセの信仰の開眼です。

皆さん、私たちは「イエス・キリストを私の救い主として信じます」と告白してバプテスマを受けて、クリスチャンになりました。信仰生活を何年送っていますか？ 貴方にとって、神さまは主なる神ですか？ 貴方は本当に僕ですか？

荒野で羊飼いとしてみせようとしていたモーセは、80歳にして信仰を新にされて、神さまの救いのみ業の舞台に呼び出されたのでした。そして主に服従して使命に生きる僕の人生を歩み始めたのでした。

[3] エジプト王の頑迷さ

神さまは口の重いモーセのスポークスマンとして、兄のアロンをお立てになりました。彼ら二人は国王の前に立ち、神の命によって杖を蛇に変えてみせました。またナイル川を杖で打ち、水を血に変えてみせました。杖を差し伸べて蛙の大群を川から這い上がらせました。杖で土の塵を打ってぶよの大群にして、人々を悩ませました。虻の大群を襲わせました。しかし国王は心を頑迷にして、民を去らせようとはしませんでした。

次に神さまは、疫病をはやらせて、あらゆる家畜の子どもを打たれました。次に悪性の腫れ物を人と家畜に生じさせました。次に雹を激しく降らせ、野に出ている人や家畜を打って死なせました。次はイナゴの大群に襲わせて、野の草や木の葉を食い尽くさせました。次には エジプト全土を3日間暗闇で覆わせました。

こうして神さまは、モーセとアロンを使って10回もしるしと災いを下して見せましたが、国王は心をかたくなにして、イスラエルの民をエジプトから去らせようとはしませんでした。そして最後の時には「引き下がれ、二度と私の前に姿を見せないよう気をつけよ。今度会ったら、生かしておかない」と恫喝したのでした(10:28)。

これらの災いは全て、イスラエルの民を解放させる決断をエジプト王にさせるために、主なる神さまが行なったしるしであり、奇跡だったのですが、王はそれがヘブライ人の神であっても、エジプトの神ではない。何故エジプトの国王が従う必要があるのか、自分こそエジプトの最高の支配者、力ある者と自負していたので、頑迷に意地を張り通そうとしたのでした。

しかし主なる神とは、全ての者の主であり、全ての者がその僕であるということです。神さまは遂に、エジプト中の初子が人であれ家畜であれ皆死ぬという、怖ろしい裁きをエジプト全家にお下しになることを決めました。国王の子どもも死ぬのです。更に一旦は荒野に脱出できたイスラエルの民を、引き戻そうと追跡したエジプト軍精鋭の戦車隊・騎兵隊・歩兵の大軍を、紅海で一挙に溺死・全滅する大敗北を加えました。こうしてエジプト国王は、主なる神こそが、エジプト全軍の主でもあるという事実を、知らされる破目になったのでした。

国王との厳しい交渉に取り組むに当たって、モーセとアロンの二人に神さまが語った言葉をもう一度読み返してみます。「わたしがエジプトに対して手を伸ばし、イスラエルの人々をその中から導き出すとき、エ

ジプト人は、わたしが主であることを知るようになる」。結果をつきつけられて、やっと主なる神さまのみ業が分かる。しかしそれまでに、如何ばかりの痛ましい犠牲が払われることになるのでしょうか。悲劇の数々をもたらした、エジプト王の頑迷さという罪の深さを嘆かずにはられません。

「人の心には多くの計らいがある。主の御旨のみが実現する」(箴言9:21)という有名な言葉がありますね。エジプト王にはエジプト王としての、「大勢の奴隷を失うことは、国家的 大損失だ。何としても国益を守らねばならない」という計らいが、心に強くありました。だからあれほどまでにかたくなになりました。しかし結局は主なる神さまの御旨が実現したのです。

私たち人間が抱く計画と神さまのご計画。神さまの計らいは、公平と正義に裏打ちされた深い愛の計画です。ですから私たち人間の計らいよりも、御旨が実現したほうが、はるかに多くの者にとって良いのです。イエスさまですら、「御心に適うことが行われますように」と祈りつつ(マルコ14:36)、十字架の道を進まれました。これが神さまを主とすること、自分は僕となって従うことなのではないでしょうか。

[結] 神を主とする祝福

私は今朝のメッセージの題を「頑迷な心の悲劇」としました。頑迷とは頑なで正しい判断が出来ない状態を言います。エジプト王はいくら神さまからサインを受けても、正しい判断が出来ずに、子どもたちの命を失い、権力の象徴である精鋭部隊をも壊滅させてしまいました。この彼の大失敗を、私たちは他人事とすることが出来ません。私たちも、正しい判断の出来ない心の頑なさを大なり小なり、持っているからです。

ではどうしたら、心を頑なにせずに、正しい判断を下したといえる行動がとれるのでしょうか。ここで「わたしは主である」とおっしゃる神さまの呼びかけが、私たちにとって、本当に大切になって来るのです。パウロはローマ教会への手紙で、こう述べています。「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われると書いてあります。『あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。』悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」(ローマ12:19~21)。

理不尽な悪に対して、仕返しせずにはいられなくなるのが、私たちの心です。しかし復讐はあらたな憎しみや怒りを生み出します。正しい判断とは言えません。神さまはイエス・キリストとなってご自身を現し、十字架について「父よ、彼らをお赦してください」と祈りつつ、死んで下さいました。この神さまを、私の主と信じて、僕になることです。

そして報復を主なる神さまにお任せし、善をもって悪に勝ちなさいというお言葉に従うのです。その時に私たちは、頑迷な心の悲劇から救われ、正しい判断に立った行動をとることになるのです。十字架の愛を示された神さまを、私の主として、その僕として生きていきましょう。

神さまを主と信じて生きていくこの祝福を、証して参りましょう。

完